

スポーツクラブの参加性を規定する 要因に関する研究

山 本 秀 人 (中京大学社会体育研究室)

川 西 正 志 (中京大学社会体育研究室)

前 川 峯 雄 (中京大学社会体育研究室)

A STUDY ON VARIOUS FACTORS PRESCRIBING THE PARTICIPATION IN SPORT CLUB

H. Yamamoto

M. Kawanishi

M. Maekawa

ABSTRACT

According to “the public-opinion poll on Sport” published by the Prime Minister’s office in 1976, about 13% of the total population joined in sport clubs in Japan.

Moreover, about 21% of non-participated wished to take part in any sport club. This indicates that the numbers of participation in sport club may be increasing in the near future, and the proper sport clubs for participation may be required.

However, few fact-finding studies on sport club are presented.

The purpose of this study is to clarify the factors prescribing the participators in sport club from the fact-finding study on sport clubs located in Aichi Prefecture.

In this study, the clubs were divided into two groups; good group (the rate of participation of members is above 80%) and poor group (the rate is under 40%).

The results are compared with two groups by means of the statistics (chi-square test).

The results were summarized as follows;

- 1) Sport events adopted in good group were popular sports in Japan.
- 2) In good group, the members were restricted to the person who live in the same neighborhood where the club located. However, most of poor group belong to a company, and the members were restricted to the worker of this company.
- 3) The club dues and operational expenses in good group are higher than in poor group.
- 4) In good group the frequency of practice is one to two days per week and in poor group it is one to three days per week. However, time of practice is two to three hours a day in good group and one to two hours a day in poor group, respectively.
- 5) Numbers of instructor in good group were higher than in poor group.

1. 緒 言

今日、我国では「エリートスポーツ」に対して「大衆スポーツ」というものが新しく登場し、参加者が増大してきている。いわゆる大衆スポーツは、技術的に優れている選手が勝利を第一に目指すのに対して、日常生活の中で、スポーツを通しての欲求充足、スポーツの楽しさ、快感を味わうため、さらには、健康に関しての問題、人間関係の回復を解決する一つ的手段として支持されているようである。

言うまでもなく、スポーツ活動は、自発的な参加を原則とし、日常的に実践してこそ価値のあるものである。しかしながら、個人でスポーツを行っていく場合、仲々持続しないことが多く、途中でやめてしまう場合も少なくはない。そのような問題を解決するための手助けとなるのが、同じような目的をもったスポーツ仲間であり、言い換えれば、スポーツを実践するための基本と考えられるスポーツクラブ（以下、クラブと略す）の存在が必要となってくるのである。

では、そのための「望ましいクラブ」とはどのような性格をもつものであろうか。すなわち、「望ましいクラブ」としての条件は様々考えられるのであるが、特に、ここではその一つとして、クラブの参加性を取り上げている。言い換えれば、スポーツをクラブで実践してこそ価値のあるものとする時、クラブが単なる名目的な集団であってはならない。したがって、成員の参加が活発な集団であることが重要である。つまり、成員が常にクラブ活動へ参加することにより、一層成員相互のつながりが保たれ、クラブとしての十分な活動・発展が望めるのである。さらに、参加の良いクラブは、クラブとして機能する教育的効果も十分発揮できると考えられ、ひいては、クラブの日常的な活動への参加の程度によって、「望ましいクラブ」としての評価判断も可能になるであろう。

これまで、クラブの発展に関しての研究は中島¹⁾、寺沢²⁾らのものがあげられる。これらの研究は、発展に影響を及ぼすいくつかの社会的要因

を明らかにしているが、参加性についての具体的な分析は行われていないようである。

したがって、本研究の目的としては、日常のクラブ活動に対する参加性を規定する集団要因を明らかにするとともに、参加状況の良いクラブの集団性格を明らかにすることである。

2. 研究の方法

昭和53年2月～4月において、愛知県下7都市で種目を限定せず、現に活動を行っているクラブ（学校関係・商業ベースのものは除く）の代表者を調査対象として、質問紙法および面接法を用いて調査を行った。さらに、不十分な回答に対しては、電話法による再調査を実施した。

調査項目は、(1)クラブ規模、(2)クラブ加入制限、(3)クラブ財政、(4)クラブ活動内容、(5)クラブ施設、(6)クラブ指導者にわたった。

本研究の主題である参加性についての質問項目としては、「日常的活動への参加状況」(以下、参加状況と略す)を設定した。つまり、日常のクラブ活動に対する参加者を全成員数に対する割合によって、(1)非常に良い(80%以上)、(2)やや良い(60～80%未満)、(3)普通(40～60%未満)、(4)やや悪い(20～40%未満)、(5)非常に悪い(20%未満)の5段階に分類し、1つを選択してもらった。

調査結果の処理方法としては、参加状況の質問に対する回答から、表1に設定したAとB、いずれかの条件を満たすものを選び、他項目とのクロス集計を行い、関連度を明らかにするため、 X^2 値とクラマー関連度係数を算出した。そして、Aを参加状況の良いクラブ、Bを参加状況の悪いクラブと考えた訳である。

表1 条件設定

A	日常のクラブ活動に対して、全成員の80%以上が参加している。
B	日常のクラブ活動に対して、全成員の40%未満しか参加していない。

なお、ここで設定した条件にあてはまるクラブ数は、表2に示すとおりである。

表2 標 本 数

	N	%
A (80%以上)	297	66.7
B (40%未満)	148	33.3

3. 結 果

研究結果のうち、主な事柄をまとめたのが表3である。以下、結果について述べていく。

表3 結 果 の 概 要

	ク ラ ブ 規 模			ク ラ ブ 加 入 制 限					ク ラ ブ 財 政		
	年 数	人 数	種 目	有・無	職域	地域	性的	年令的	会費有・無	運営費の内容	
A	5 年未満 40.4%	10～30 人未満	野 球 バレーボール	有 89.2%	有 36.2%	有 44.2%	男・女 半 々	壮 年 75.1%	有 93.6%	財政的に安定、高額 な自己資金で運営	
B	5～10年 未満 29.7%	10～30 人未満	サッカー 野 球	有 82.4%	有 56.6%	有 21.3%	男のみ 74.1%	勤労青年 86.1%	有 87.8%	自己資金と補助金	
	ク ラ ブ 活 動 内 容					ク ラ ブ 施 設		ク ラ ブ 指 導 者			
	創 設 動 機	規約	定練	練 日 数	練習時間	施設の種類	評 価	有・無	資格有	雇用形式	
A	スポーツ好き	有 65.0%	有 77.4%	週 1 ～ 2 日	2 ～ 3 時間 未満	公的施設の 利用	だいたい い つ も	有 51.9%	少 数 スポ指	有 給 21.4%	
B	スポーツ好き 学生時代の O B ・ O G	有 58.1%	有 66.9%	週 1 ～ 3 日	1 ～ 2 時間 未満	公的施設の 利用	だいたい い つ も	有 39.2%	少 数 スポ指	有 給 8.6%	

(1)クラブ規模

まず、クラブ規模の中でX²検定において、参加状況との間に有意差がみられたのは、存続年数、構成人数、スポーツ種目のすべての項目である。

すなわち、表4は、参加状況と存続年数との関係を示したものであるが、日常のクラブ活動に対して全成員の80%以上が参加しているクラブ（以下、Aと略す）においては、5年未満が高い割合を示している。日常のクラブ活動に対して全成員の40%未満しか参加していないクラ

ブ（以下、Bと略す）では、15年以上のクラブが若干ではあるがAより高い割合となっている。

次に、構成人数との関係を示したのが表5である。A・Bとも高い割合を示しているのは、10~30人未満となっているが、Aに比べBの方が若干ではあるが人数規模の大きなところへ分布している。

スポーツ種目については、表6に示すようにAで高い割合を示しているのが野球・バレーボールとなっており、Bにおいては、サッカー、野球が高い割合を示している。

表4 存続年数 表5 クラブ構成人数 表6 スポーツ種目

カテゴリー 群	N	5年未満	5~10年未満	10~15年	15~20年	20年以上	D	10人未満	10~30人未満	30~50人	50~70人	70~100人	100~150人	150~200人	200人以上	D	野 球	ソフトボール	バスケットボール	ハンドボール	バレーボール	サ ッ カ ー	ピンポン	テ ニ ス	卓 球	バドミントン	格技(柔剣空)	ス キ ー	陸 上 競 技	体 操	自転車競技	登山	弓 道	射 撃	馬 術	D
		N	N	N	N	N	K	N	N	N	N	N	N	N	N	K	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	K
A	297	40.4	23.9	17.9	4.4	7.7	5.7	11.1	76.4	4.7	3.0	1.4	1.4	0.3	0.7	1.0	27.5	15.1	2.4	1.4	26.2	7.4	1.4	1.0	3.0	3.7	5.7	1.4	1.4	0.7	0.0	0.7	0.0	0.3	0.7	0.0
B	148	24.3	29.7	14.2	10.2	13.5	8.1	4.1	70.9	12.8	4.7	4.1	0.7	0.0	0.7	2.0	18.9	4.1	6.1	2.0	10.8	30.4	0.0	2.7	5.4	1.3	4.1	2.0	1.3	0.7	0.7	0.7	6.1	0.0	2.0	0.7

(P<0.01)

(P<0.01)

(P<0.001)

以上のように、参加状況とクラブ規模に関する条件との関連をみると、参加状況の良いクラブAにおいては、存続年数で5年未満のクラブが多くなっている。さらに、構成人数では、Bに比べ少人数規模になっており、スポーツ種目では、野球、バレーボールが主になっている。

(2) クラブ加入制限

クラブ加入制限の中で χ^2 検定において、参加状況との間に有意差がみられたのは、加入条件の有無、性的条件、年齢的条件の有無、年齢的範囲の学生・勤労青年、職域的条件、地域的条件、スポーツ技能的条件の各項目であるが、年齢的範囲の児童・生徒・壮年・老年に関しては、有意差がみられなかった。

まず、クラブ加入条件の有る割合についてみ

また、地域的条件の有る割合では、職域的条件とは逆にAが44.2%、Bが21.3%とAの方が高い割合を示している。(表8)

表9の性的条件の内容をみると、Aでは男女の比率がほぼ同じになっているが、Bにおいては、男性のみが74.1%と高い割合を示している。

次に、表10の年齢的条件の中では、勤労青年でなければ加入できないという割合がAよりBの方がかなり高くなっている。

以上、参加状況とクラブ加入制限に関する条件との関連をみると、A・Bの間で大きな差を示すものとしては、職域的条件・地域的条件、さらに、性的条件である。つまり、参加状況の良いクラブAにおいては、加入条件として、参加者が居住している地域の人々をクラブ加入対象者としている。

表7

加入条件の有無

表8 各加入条件別の有無

表9

性的条件の内容

群	カテゴリー N	有 無			カテゴリー N	性 的			年 齢			職 域			地 域			スポーツ技能			そ の 他			カテゴリー N	男	女
		有	無	D・K		有	無	D・K	有	無	D・K	有	無	D・K	有	無	D・K	有	無	D・K	有	無	D・K			
A	297	89.2	10.8		265	60.0	40.0	0.0	96.6	3.4	0.0	36.2	63.8	0.0	44.2	55.8	0.0	5.3	94.7	0.0	17.7	82.3	0.0	159	44.7	55.3
B	148	82.4	17.6		122	47.5	52.5	0.0	99.2	0.8	0.0	56.6	43.4	0.0	21.3	78.7	0.0	4.1	95.9	0.0	13.9	86.1	0.0	58	74.1	25.9

(P<0.05)

(P<0.001)

(P<0.05)

(P<0.001)

(P<0.001)

(P<0.05)

(N.S.)

(P<0.001)

表10 年齢的条件の内容

群	カテゴリー N	児童・生徒			学 生			勤労青年			壮 年			老 年		
		有	無	D・K	有	無	D・K	有	無	D・K	有	無	D・K	有	無	D・K
A	265	7.5	92.5	0.0	7.2	92.8	0.0	62.3	37.7	0.0	75.1	24.9	0.0	19.6	80.4	0.0
B	122	4.9	95.1	0.0	16.4	83.6	0.0	86.1	13.9	0.0	77.9	22.1	0.0	22.1	77.9	0.0

(N.S.)

(P<0.01)

(P<0.001)

(N.S.)

(N.S.)

ると、Aでは89.2%、Bでは82.4%というように、いずれも高い割合を示し、何らかの加入条件の存在を示している。(表7)

次に、各加入条件別の有無の中で職域的条件、つまり、同じ職場・会社でなければ加入できないという条件の有る割合は、Aでは36.2%であるが、Bでは56.6%と高い割合を示しており、職域的条件の有るクラブ、言い換えれば、その会社内の社員のみしか加入できないクラブは、参加状況があまり良くないことを示唆している。

(3) クラブ財政

クラブ成員の参加状況が、クラブの財政によってどの程度規定されるかを χ^2 検定でみると、有意差がみられたのは、個人会費年額の大小だけであり、他の会費の有無、クラブ運営費額、クラブ運営費確立方法は、有意差がみられなかった。

まず、会費の有る割合をみるとAが93.6%、Bが87.8%となっており、Aの方が若干ではあ

るが高い割合を示している。(表11)

次に、表12の個人会費年額と表13のクラブ運営費額についてみると、いずれにおいても、AがBより高額の傾向を示しており、活動を行っていくための資金が豊富であることを示唆している。

た。

表15の競技レベルについては、全体的にみると若干ではあるがBの方が高くなる傾向を示している。

定期的練習の有る割合では、Aが77.4%、Bが66.9%となっている。さらに、練習はA・B

表14 クラブ運営費確立方法

表11 会費の有無				表12 会費金額(年額1人当)								表13 クラブ運営費額(年額1クラブ当)								費確立方法										
群	カテゴリー N	有	無	D ・ K	カテゴリー N	5千円未満	5 ~ 10千円	10 ~ 15千円	15 ~ 20千円	20 ~ 25千円	25千円以上	D ・ K	カテゴリー N	10千円未満	10 ~ 20千円	20 ~ 30千円	30 ~ 50千円	50 ~ 70千円	70 ~ 100千円	100 ~ 150千円	150 ~ 200千円	200 ~ 250千円	250千円以上	D ・ K	自己資金	自己資金と補助金	補助金	なし		
				K		K	K	K	K	K	K	K		K	K	K	K	K	K	K	K	K	K	K	K	K	K	K	K	K
A	297	93.6	6.1	0.3	278	40.4	30.9	19.4	2.9	2.5	3.2	0.7	297	1.4	10.4	9.8	12.1	7.7	11.8	10.4	10.8	5.4	11.8	8.4	55.9	38.7	3.7	1.7		
B	148	87.8	11.5	0.7	130	57.8	29.2	6.9	2.3	0.8	1.5	1.5	148	2.7	8.1	6.1	16.2	8.8	8.8	17.6	6.1	4.0	7.4	14.2	47.3	41.2	6.1	5.4		
(N.S.)					(P<0.01)									(N.S.)									(N.S.)							

クラブ運営費確立方法については表14に示した。A・Bとも一番高い割合を示しているのが自己資金となっており、次に、自己資金と補助金がAでは38.7%、Bでは41.2%というように、Bの方がやや高い割合を示している。

以上のように、参加状況とクラブ財政に関する条件との関連において、A・Bの大きな差を示すものとしては、参加状況の良いクラブAがBに比べて個人会費およびクラブ運営費が高額になっていることであろう。

(4) クラブ活動内容

クラブ活動内容の中でX²検定において、参加状況との間に有意差がみられたのは、競技レベル、さらに、定期的練習についての各項目であるが、規約については、有意差がみられなかつ

とも週単位がほとんどであり、週あたりの練習日数においては、Aが1～2日、Bでは1～3日が高い割合を示している。(表16, 17, 18)

次に、表19の1回の練習時間についてみると、Aで高い割合を示しているのが、2～3時間未満の49.6%、次に、1～2時間未満となっているが、Bにおいては、Aとは逆に高い割合を示しているのが、1～2時間未満の51.6%、次に、2～3時間未満となっており、Aの方がBよりも練習時間は長くなっている。

以上、参加状況とクラブ活動内容に関する条件との関連をみると、競技レベルについては、A・Bとも同じような傾向を示しているが、定期的練習の週あたりの日数、練習時間については、A・Bの間に大きな差があることを示している。つまり、参加状況の良いクラブAの定期

表15 競技レベル 表16 定期的練習の有無 表17 定期的練習の単位 表18 週あたりの練習日数 表19 1回の練習時間

カテゴリー 群	N	クラブ内	市・町・村	地区	県内	全国	その他	D・K	有	無	D・K	カテゴリー N	月	週	D・K	カテゴリー N	1日	2	3	4	5	6	7	カテゴリー N	1時間未満	1～2時間	2～3時間	3～4時間	4時間以上	その他	D・K	
A	297	8.4	56.9	11.5	13.1	6.4	1.7	0.7	1.3	77.4	22.6	0.0	230	13.5	86.5	0.0	199	52.9	18.6	9.5	4.0	4.5	5.5	5.0	230	5.2	29.1	49.6	13.5	0.9	1.7	0.0
B	148	12.8	44.6	11.5	20.9	8.8	0.0	1.4	0.0	66.9	32.4	0.7	99	15.2	83.8	1.0	83	39.9	33.7	12.0	4.8	2.4	6.0	1.2	99	4.0	51.6	37.4	1.0	1.0	3.0	2.0
(P<0.05)				(P<0.05)				(P<0.05)				(P<0.05)				(P<0.001)																

($P < 0.05$)

Aが21.4%, Bが8.6%というようにどちらも低い割合ではあるが, Aの方がBより高い割合を示している。(表26)

以上, 参加状況とクラブ指導者に関する条件との関連をみると, 指導者の有無, 雇用形式以外については, A・Bとも同じような傾向を示している。つまり, 参加状況の良いクラブAにおいては, Bに比べ指導者の存在が多く, 雇用形式についても, 若干ではあるがBに比べると確立されているようである。

以上のように, 参加状況と6つのクラブ条件との関係について述べてきたが, さらに, 参加状況と各項目との関連を X^2 値とクラマー関連度係数によって示したのが表27である。クラマー関連度係数をみると, 第1位は, 種目構成となっており, 以下, 練習日数, 練習時間, 創設動機, 年齢的範囲(勤労青年), 性的条件, 指導者採用方法, 指導資格, 地域的条件, 個人会費年額と続いている。これらは, X^2 検定において0.1~5%水準の危険率で有意差のみられた項目であり, 参加状況との関連性はあると考えられる。

4. 考 察

以上の結果から, 参加状況の良いクラブAは, 以下のような特徴があげられる。

まず, 参加状況の良いクラブの存続年数は, 5年未満が多く, 構成人数は, 10~30人未満となっており, 種目的には, 野球・バレーボールのクラブが多い。クラブの加入については, 大多数のクラブに何らかの条件が存在しており, クラブ構成員若しくは, 入会対象者の所属が明確にされているといえるであろう。その中でも注目すべき点は, 地域的条件を有しているクラブが多いことである。

クラブ財政においては, Bに比べるとAは, 活動を行っていくだけの資金があり, その内容としては, 受益者負担が多く, 補助金はごく少額である。次に, 規約については, 成文化, 口約束の種類は別として存在している。

定期的練習については, 週に1~2回程度行っており, 練習時間は2~3時間未満である。さらに, 練習場所については, 公的施設の利用

が多く, 利用に対する評価では, 「だいたい希望通りに利用できる」となっている。

指導者は, 約半数のクラブが確保しており, その指導者の中ごく少数ではあるが, スポーツ指導員の資格を有している。さらに, 指導者の雇用形式では, 「有給」というのがBより高い割合を示しているが, 全体としてはごく少数である。

以上, 参加状況の良いクラブAの特徴を述べた訳であるが, このAとBを比較した場合, 種目構成, 加入条件の内容, 財政面の内容, 定期的練習の内容, 指導者の各項目に相違がみられた。さらに, これらの項目は, X^2 検定, クラマー関連度係数においても有意差が認められた。

尚, それらの主な結果について, 大きくは以下に述べる3点についてまとめて考察をすすめていく。

(1) 成員の自発的参加意欲とクラブの参加性

クラブの参加性を規定する重要なものとして, クラブ成員がいかに関心を持ってクラブ活動へ参加する意志を有しているかがあげられる。つまり, クラブ成員がどのような仲間構成・人間関係を保ちながら, よりクラブへの参加意欲を増しているか。また, クラブ運営の重要な柱であるクラブの財政確立について, どれほど積極的に, かつ自立的な意識を有しているかなどである。

まず, 加入条件において有意差があり, A・Bの間で大きな差異としては, Aが地域的条件, Bが職域的条件, 年齢的条件のうちで勤労青年の条件を有していることである。

参加状況の良いクラブが地域的条件を有していることは, 地域内におけるクラブ活動を通して, 地域社会の連帯感を強め, 地域社会の形成に寄与していける可能性が大きいことを示唆している。つまり, 地域社会における住民相互の交流や助け合いの場, 身近な生活空間での生きがいのある生活を求めるための一つの場として, 住民一人々々がクラブを必要とし, クラブに対しての価値を見い出していると考えられる。

反面, 参加状況の悪いクラブが職域的条件, さらに, 年齢的に勤労青年という加入条件を有

表27 クラブ参加状況と各項目との関連

	項 目	X ² 値	P	\sqrt{Cr} 係 数
規模	存 続 年 数	18.845	※※	0.206
	構 成 人 数	20.470	※※	0.214
	ス ポ ー ツ 種 目	95.726	※※※	0.464
加 入 条 件	加 入 条 件 (有・無)	4.021	※	0.095
	性 別 条 件 (有・無)	21.208	※※※	0.218
	(内 容)	22.626	※※※	0.225
	年 齢 別 条 件 (有・無)	6.164	※	0.118
	年 齢 別 範 囲(児童・生徒)	4.918		—————
	(学 生)	11.649	※※	0.162
	(勤労青年)	25.842	※※※	0.214
	(壮 年)	4.364		—————
	(老 年)	4.336		—————
	職 域 別 条 件 (有・無)	20.374	※※※	0.214
	地 域 別 条 件 (有・無)	22.212	※※※	0.223
	スポーツ技能別条件(有・無)	6.230	※	0.118
	そ の 他 の 条 件 (有・無)	4.872		—————
	会 費 (有・無)	4.308		—————
	会 費 金 額	21.861	※※	0.222
財 政	ク ラ ブ 運 営 費 額	16.949		—————
	クラブ運営費確立方法	7.458		—————
活 動 内 容	創 設 動 機	31.740	※※※	0.267
	競 技 レ ベ ル	14.393	※	0.180
	規 約 (有・無)	1.996		—————
	定 期 的 練 習 (有・無)	7.220	※	0.127
	(単 位)	9.608	※	0.147
	週あたりの練習日数	18.837	※	0.206
	1 回 の 練 習 時 間	34.109	※※※	0.277
施 設	利 用 施 設 (種 類)	0.760		—————
	利用施設に対する評価	2.529		—————
指 導 者	指 導 者 (有・無)	7.024	※	0.126
	採 用 方 法	22.610	※※	0.225
	指 導 内 容	14.422	※	0.180
	指 導 者 の 資 格	22.395	※	0.224
	雇 用 形 式	8.105	※	0.135

(注) ※……P<0.05 ※※……P<0.01 ※※※P<0.001

していることから、これらのクラブは、会社内で結成されたクラブであると考えられる。したがって、同一の職場の従業員によって構成され、仲間意識は強く、クラブの結合は強力であり、

クラブ活動に必要な経費は、事業主から支給される点など条件は整っているはずである。さらに、クラブを新しく結成する場合も、以上のような条件の整備の点からも職域の方が比較的容

易であろうと考えられる。しかしながら、参加状況が悪いということは、成員の意識の中に職場の延長としてクラブ活動を捉え、労働のためのスポーツという意識、さらに、職階性の影響によって参加状況を悪くしていると考えられる。つまり、地域のクラブのように、自分達の手によってクラブを運営し、発展させていこうという意識が欠けているのではないかとと思われる。

以上、加入条件について述べてきたが、その加入条件の存在によって、平等の意識を有している仲間が集まり、クラブ内の秩序・規律が保たれ、クラブ的基盤が安定していくと考えられる。

次に、財政面においては、AがBよりもクラブ活動を行っていく資金に恵まれており、その内容としては、Aの会費がBよりも高額であり、クラブの運営は、成員達の会費に依存している割合が高い。これに対し、Bは会費と補助金によりクラブの運営を行っている。

AがBよりも会費が高額であるにもかかわらず参加状況が良いということは、そこに高い会費を出してまでスポーツ活動を行っていききたいという成員の意識、さらに、自分達の手でクラブを運営しているという意識が喚起されているのではないだろうか。つまり、個々人の余暇活動に対しての価値感の捉え方として、Aには、余暇をいかにして有益に過ごすべきかという考え方が浸透していると思われる。言い換えれば、個人的な側面として、スポーツを行っていくための余暇時間があり、さらに、実際に活動が続けていく場合に受益者の負担金が必要である。それが少々高額ではあっても、そのような問題よりも、スポーツを通しての充足感の方に価値を認めていると思われる。クラブの運営資金というものは、名目的な補助金を受けて活動を行っていくよりも、成員達の自立的な資金の基盤の上でクラブを運営していく方が、今後の発展に作用していくものと考えられる。

以上、成員の自発的参加意欲を示すであろうクラブの加入資格・クラブの財政とクラブの参加性について考察を行った訳であるが、参加状況の良いクラブは、成員の意識の問題としての

地域を基盤とした連帯性、さらに、受益者負担意識の高さとしての自立性・積極性が参加性を高めていると思われる。

(2) クラブ活動内容の質・量とクラブの参加性

次に、クラブの参加性を規定する重要なものとして、クラブ自体の活動状態があげられる。つまり、そのクラブがいかに積極的にスポーツと取り組み、成員の参加を促進するようなクラブの内容を有し、成員に対して、価値のある活動を提供し得るかどうかである。それらは、クラブの種目・練習の定期性と充実した内容とクラブの参加性との関連においてみられるであろう。

まず、クラブの活動種目については、Aに集中しているのが、野球・バレーボールとなっており、我国において誰もが手軽に楽しめ、参加しやすい大衆化された種目である。Bにおいては、技術的にAの野球・バレーボールより高度なものを要求され、活動する年齢層も限られ、あまり一般大衆化されていないサッカーとなっている。このような、種目が持っている特性によって参加状況に影響していると考えられる。総理府の「スポーツに関する世論調査」によると、現在所属しているクラブの種目は、野球が3分の1と断然多く、次に、バレーボールとなっている。さらに、加入希望者の希望種目も男子では野球、女子ではバレーボールが圧倒的に多くなっており、人気の程がうかがえる。サッカーについては、どちらにおいても、ごく低い割合となっている。さらに、文部省が実施した「昭和52年度地域スポーツクラブ育成指定市町村調査結果」⁴⁾においても、活動種目の割合は、野球が33.1%と1位を占めているが、サッカーは2.7%とごく低い割合である。このように、野球・バレーボールとサッカーという種目もっている大衆性・人気度・技術的困難度という特性によって、参加状況に影響していると考えられる。

定期的練習については、Aが週1～2日の割合で、1回の練習時間が2～3時間未満となっているのに対して、Bは週1～3日と日数は多

くなっているが、1回の練習時間は1～2時間未満とAより短時間になっている。つまり、参加状況の良いクラブAは、成員が参加するのに可能な日、さらに、成員の負担にならない日数として週1～2日選び、1回の練習時間を比較的長くとり、効率的・集中的に練習を行っているようである。文部省が実施した「昭和52年度地域スポーツクラブ育成指定市町村調査結果⁵⁾」においても、週1～2回のクラブが51.6%と一番高い割合を示している。

定期的練習の存在は、クラブ成員相互の連帯、クラブ自体の運営において重要な要因であることは言うまでもないが、成員の参加が悪くては、定期的練習の意味がないのである。成員の負担にならない日数、さらに、成員の都合の良い曜日、時間帯に定期的練習を組み入れ、成員達の参加を良くし、成員間のコミュニケーションが十分に図れるようにする必要があるであろう。

以上、クラブ自体の活動の内容とクラブの参加性について考察を行った訳であるが、参加状況の良いクラブは、大衆化された種目への志向、定期的練習の適切な量が、参加性を高めていると思われる。

(3)クラブの外部的条件としての施設・指導者とクラブの参加性

さらに、クラブの参加性を規定する重要なものとして、施設・指導者との関連があげられる。つまり、練習を行っていくための施設をいつでも気軽に利用でき得るようになっているかどうかであり、さらに、クラブ専任の指導者が存在しているかどうかである。

まず、施設については、A・Bとも公的施設の利用が多く、利用評価に関しては、「だいたい」あるいは、「いつも希望通りに利用できる」というように、いずれにおいても同様の傾向を示しており、施設に関しては、A・Bとも比較的良い評価を得ているようである。

指導者については、Aの方がBよりも多く確保している。この指導者というものは、ただ単に成員の実技面の指導者だけではなく、クラブの管理・運営面の指導者もクラブの発展に重要

な役割を果たすものであろう。指導者の資格、さらに、報酬制度については、A・Bいずれにおいても有資格者はごく少数であり、報酬制度も確立されてはいないが、A・Bを比較するとAの方が若干良くなっている。

これまでの我国の指導者というのはボランティアの人々の指導に支えられており、当然ながら無給の指導者が多いというのが現状である。しかしながら、今後のクラブ発展を考えた場合、クラブ自身が指導者を積極的に確保していくべきであり、その指導者も実技・管理・運営にわたっての指導が必要になってくるであろう。さらに、指導者の資格基準と報酬制度の明確化は、社会的信頼の保証、指導者の資質を向上させる点からも必要であろう。

以上、施設・指導者の確保とクラブの参加性について考察を行ってきたが、参加状況の良いクラブは、指導者の確保、さらに、報酬制度の確立が参加性を高めていると考えられる。

5. ま と め

参加状況の良いクラブの集団性格を究明し、さらに、クラブの参加性を規定する要因を明らかにすることを目的として検討を加え、以下の結果を得た。

まず、参加状況の良いクラブは、存続年数が5年未満であり、構成人数は10～30人程度である。さらに、種目としては、野球・バレーボールクラブとなっている。

加入条件は、地域的条件を有しており、クラブ構成員若しくは、入会対象者の所属を明確にしている。

クラブ運営の資金は安定しており、受益者負担（会費）で運営されている。

定期的練習は、週1～2回、練習時間は2～3時間程度であり、クラブ指導者は、約半数のクラブが確保している。

さらに、参加性を規定する要因として、以下の条件があげられる。

- (1)スポーツ種目
- (2)加入条件
- (3)クラブ運営資金

(4)定期的練習

(5)指導者

謝 辞

本研究を進めるにあたり、調査結果の処理方法などについて、適切な御指導をいただいた筑波大学 教授 松浦義行先生に深く感謝の意を表わす次第である。

また、本調査を実施する時に御協力いただいた、スポーツクラブの関係各位の諸氏ならびに本学社会体育研究室員の方々にもお礼を述べると同時に、本研究の不備な点について、今後、きたんない御批判をいただきたいと思う。

引 用 文 献

- 1) 中島豊雄; 「地域スポーツ集団の社会学的研究—軟式野球チームの存続と崩壊」名古屋大学教養部紀要, 16: 59—84, 1972. .
- 2) 寺沢 猛; 「地域スポーツ集団の社会学的研究—地域スポーツ集団の形成と存続, 発展に働らく社会的要因」豊田工業高等専門学校紀要, 1: 69—85, 1968.
- 3) 総 理 府; 「スポーツに関する世論調査」, 1976.
- 4) 文部省体育局監; 全国体育指導委員研究協議会資料, 「健康と体力」Vol 10, NO. 7, 1978, 第1法規.
- 5) 文部省体育局監; 前掲書.